

『ローマ亡き後の地中海世界』

塩野七生 著

国際領域 上席主任研究官 泉原 明



『ローマ亡き後の地中海世界』
著者／塩野七生
出版年／2014.8～9
発行所／新潮社

この物語の後半の1522年時点の国際政治の主人公は、トルコ（人口1600万人）のスルタン・スレイマン一世（28才）、フランス（人口1600万人）王・フランソワ一世（28才）、スペイン（人口800万人）王かつ神聖ローマ帝国（人口1000万人）皇帝・カルロス一世（22才）、ヴェネツィア共和国（人口145万人）、ローマ法王で、この人物達の間でパワーゲームが繰り返されます。

交易立国であるヴェネツィアは、東西を強国に挟まれながらも、売り手と買い手の両方が必要であり、そのための情報収集活動、冷徹な政治判断で凌いでいましたが、「強国とは戦争も平和も思いのままになる国家のこと」とのヴェネツィアの外交官の言葉のとおり、トルコ帝国277隻とヴェネツィア・スペイン連合艦隊203隻の地中海最大かつ最後の海戦となる「レパントの海戦」が1571年秋に行われ、連合艦隊が完勝しました。しかし、スペイン無敵艦隊はその勝利のわずか17年後、イギリス海軍に完敗してしまいます。

著者は、各時代の地中海全体を鳥瞰し、重要な地点をクローズアップする、舞台を知るために設定季節に実際に現地に出て肌で感じ、現地での綿密な情報収集を行い、写真や図表を用いて事実を述べる、という方法で時空を超えて物語が眼前に広がるように書き上げていきます。それ故、各設定の時間軸、地域的なつながり、時代背景などが自然に繋がっていきます。

肉付けとして書かれている興味深い話の一部を並べてみると、イスラム教徒になることの魅力、イスラム教国がキリスト教国を攻撃した理由、ヴェネツィアという土地や人口が少ない海洋都市国家がなぜ強大な軍事力を持つ強国でありえたのか、「神聖同盟」の実際、スペインは超大国でありながら「パクス・ヒスパニカ」の時代が訪れなかった理由、シェークスピアの作品にイタリアが舞台となっている物が多い理由、など多くのものがあります。

ローマ帝国が分裂、西ローマが滅亡した476年から、1492年のコロンブスのアメリカ発見までの約1000年間は「暗黒の中世」と呼ばれる時代で

した。本書は、この時代を中心として、地中海におけるキリスト教国側の「聖戦（グエッラ・サンタ）」vsイスラム教国側の「聖戦（ジハード）」を底流とし、国家間のパワーゲームに焦点を当てた作品です。

イスラム教国側は地中海で対立するイタリア、スペイン及びフランスへの戦争行為の手段として「海賊」を活用してきました。イスラム教国における海賊は実入りも名誉もあるよい商売でした。収益の12%が総督に上納され、1%が港の修理費、1%がモスク及び学校の費用、その他貧者救済のための費用に提供され、残る80%以上のものを資本家と実働部隊が山分けしました。海賊がさらってきて奴隷にしたキリスト教徒はローマ帝国時代に作られた「浴場」に繋がれ、労働力として、主に海賊船の漕ぎ手として使役されました。トルコ帝国は後方攪乱の実働部隊として海賊を活用し、その頭目である「赤ひげ」は正式にトルコ海軍総司令官（アドミラル）に任命され活躍しました。

キリスト教国側のイスラム教国側に対する行動の最も有名なものは十字軍ですが、単発的であって永続的な効果はありませんでした。キリスト教徒の奴隷達を救済する組織として活動した「救出騎士団」の活動期間は1222年から1779年まで557年間にわたり、344回の奴隷救出（身代金支払い及び捕虜交換）を行い、100万人以上を救出しました。地中海から海賊が消えるのは、西欧列強が地中海を植民地化した1830年、そして海賊行為厳禁を宣言した1856年の「パリ宣言」まで待たなければならなかったのです。